

児童・生徒の社会的自立に向けた 個別の指導計画作成システムの構築（2）

——附属東雲小・中学校養護学級における個別の指導計画の作成及び実践——

黒瀬 基郎	鈴木 盛久	今崎 英明	荒森 紀行
泉本 聖子	奥野 正二	国元 育子	関 和典
梶山 雅司	金子 和代	中田 美緒	船津 守久
谷本 忠明	小林 秀之	若松 昭彦	

I 研究の目的

現在、教育の個別化は障害児教育のみならず、通常の教育においても強く求められている。障害のある児童・生徒の現在及び将来の学校・家庭・地域での充実した生活を実現するためには、個々の児童・生徒の実態把握に基づく指導目標を設定し、その達成に向けて学校、家庭、専門機関が密接に協力していくことが必要である。本研究の目的は、児童・生徒の自立に向けた支援を視野に入れ、個別の指導計画の作成というプロセスを通して、卒業後の進路等を踏まえた授業を作り上げていくための新たなシステムを構築していくことである。その最初の取り組みとして、昨年度は、附属東雲小・中学校養護学級に在学及び卒業生の保護者を対象として、学校、家庭、大学間の協力のあり方等に関するアンケート調査を実施した。その結果、相互の連携や児童・生徒に応じた教育内容・方法などに関して、大学、学校が抱える課題が明確化された。

今年度は、この結果を踏まえて、現在小・中学校養護学級で作成、実践、評価等が進められている個別の指導計画の実際を紹介し、これまで両学級が独自に積み上げてきた教育実践に、個別の指導計画の基本理念がどのように活かされ、具体化されつつあるのかについて検討を行った。

II 小学校養護学級の個別の指導計画

1. 本年度の研究推進についての基本的な考え方

(1) 昨年度までの経緯

養護学級では、本校の研究主題である「自立に向かう子どもたち」を掲げ、実践を行っている。

研究主題を設定した初年度は「自分で決める場を大切に」というサブテーマを掲げ、児童の自己選択・自己決定をいかにして保障していくかということについて、児童の選択の実態と集団とのかかわり、それに基づく支援についての表を作成して実践を行い検証していった。また、これまでの自己選択・自己決定に焦点をあてた実践を行う中で、かかわりに焦点をあてた実践がより必要になるということが検証の中から浮き彫りとなってきた。そこで「人やものとかかわることを大切に」というサブテーマを設定してよりかかわりに重点を置いた表の作成を行った。その際従来の表のかかわりの部分を細分化していくという作業を行い、それを実践、検証していった。

昨年度までの実践においてかかわりの改善はいくつか見られたものの、かかわりを通して個々の児童が何を学んでいくかということをより明らかにする必要性が出てきた。個々の児童が何を学び、そのためにはどんな支援が必要か、すなわち自立に向かうための基礎・基本を明確にしていこう必要があるということを感じた。養護学級ではその根幹に「個別の指導計画」を掲げ、その作成や実施を行う中で、どういったことが本校養護学級の「自立に向かうための基礎・基本」となるのかということについて本年度研究を進めていくこととした。

(2) 本年度の研究仮説について

① 学習の「もと」となるもの

個々の固有の発達課題を見据え、適切な支援をしていくためには、前述したように個別の指導計画の中に個々の発達課題が盛り込まれていることが必要であ

Motoo Kurose, Morihisa Suzuki, Hideaki Imasaki, Noriyuki Aramori, Seiko Izumoto, Masatsugu Okuno, Ikuko Kunimoto, Kazunori Seki, Masashi Kajiyama, Kazuyo Kaneko, Mio Nakata, Morihisa Funatsu, Tadaaki Tanimoto, Hideyuki Kobayashi, Akihiko Wakamatsu : System Development for Devising Individualized Instruction Programs for Students' Social Independence (2) —Devising and practicing individualized instruction programs in special classes of the Attached Shinonome Elementary and Junior High School—

る。

また、本校の本年度のサブテーマに照らし合わせ、「基礎・基本」を考えていくためには、個別の指導計画の中に「基礎・基本」となるものがあって、それを定義付けし、研究を深めていくことが必要となる。

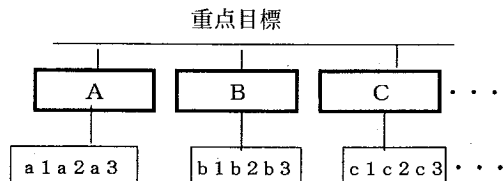
養護学級では、その「基礎・基本」となるものを、個別の指導計画の中の「基礎課題」と位置づけて研究を行うこととした。

本校養護学級での個別の指導計画の作成手順としては、以下のようなことがあげられる。

- 実態把握
- 保護者との話し合い
- 教官同士の共通確認
- 実施にあたっての注意の確認

このような手順で作成を行うが、基本的な考え方として以下の構造図に表されるような考え方をもとにすることとする。

- A・B・C…中心課題（1年を一応のスパンとして）
- a 1～c 3…基礎課題（授業レベルで取り組んでいく課題で中心課題から具体化する）



中心課題の領域として以下の5つを考えた。

- a. 健康 b. 基本的な生活習慣 c. 言語、数量
- d. 社会性 e. 情緒

この5領域の中心課題を1年間の長期目標として設定し、その目標を達成するためにa 1～c 3までの基礎課題を作成するといった手順である。

ここでの基礎課題は各教科・領域、道徳、特別活動、総合的な学習の時間のそれぞれの内容に細分化され、その内容を修得することで中心課題（長期目標）が達成されると考えられる。

本校養護学級では、本年度、この基礎課題を個々の児童が学習をしていく上での「基礎・基本」となり、と定義した。基礎課題は、上述したように各教科・領域、道徳、特別活動、総合的な学習の時間のそれぞれに設定されるものであり、それは本校の2学期制に合わせて「短期目標」として前期・後期に分けて作成することとした。

② 仮説について

今年度は、以上のような個別の指導計画を作成していく中で、児童が個々の中心課題を達成していくために設定した基礎課題が適切であったかどうかを実践、

検証していくこととする。その際、本校養護学級が授業を行う際に個々に設定している「目標行動」と短期目標（基礎課題の半期分）がどのように関連し、有機的に授業が機能していくかということについて、短期目標とそれぞれの教科・領域等での単元の目標と単元の中の1授業の個々の目標行動を関連づける表を作成する。その中で授業実践を行うことで、1つの授業が「個別の指導計画」を作成しながら、その計画が実際に個々の児童にとって適切で有機的に機能しているのかということについて「総合的な学習」の実践事例を例に挙げながら実践・検証を行っていきたい。

2. 本年度の実践について

(1) 具体的方策について

① 実践の方法

実践は以下の手順によって進めていった。

- a. 児童の実態把握
- b. 保護者との懇談
- c. 本年度の重点目標、中心課題（長期目標）の設定
- d. 家庭訪問
- e. 基礎課題（短期目標）の設定
- f. 教育相談
- g. 個別の指導計画による指導の実施
- h. 関連表作成（半期ごとに検証）

aについては、日常の家庭からの連絡帳や日々の学校生活の中で各担任が児童を観察、支援していく中で、児童の実態を把握する。また、現在はまだ行ってはいないが、児童の発達を客観的にみとめるための手段として、各種の発達検査を行うことが必要であると考えている。

bについては、担任が把握している情報を確認したり家庭での情報をさらに取り入れたりするため、さらには保護者の児童に対する願いを聞き、児童をどのように育てたいか、育てていきたいか、ということについての話し合いを行う。

a・bという過程を経て、それぞれの担任が本年度の個々の児童の重点目標、中心課題を設定する。その際a・bの確認事項を十分考慮に入れて設定することとした。

その後、dの家庭訪問を実施する。家庭訪問では自力登下校の現状や課題点を探っていくことと並行して、もう一度保護者の児童の教育に対する願いを聞く。このとき前回よりもさらに具体的な学習の内容についての聞き取りを行う。

eでは家庭訪問の確認事項とそれまでの確認事項を考慮に入れて中心課題を修正するべき点があれば修正

しつつ短期目標を設定する。この時、それぞれの教科・領域、道徳、特別活動、総合的な学習の時間の内容を考え、児童が個別の指導計画の短期目標が達成できるように単元構成や学習内容を視野に入れつつ設定していく。

fでは、実際に設定された個々の「個別の指導計画」を保護者に見ていただき、これまでの確認事項が反映されているかの話し合いを行う。保護者から意見が出てくればその場で相談を行い、目標の中身や文章表現などを変更していく。設定されたものを本格的に実施していくという手順をとった。さらに、今回はそれぞれの教科や総合的な学習の時間の単元を抽出し、その中での関連性を見ていくことや実際に有機的に「授業」が機能しているかということについての検証を行っていくこととする。表についてはまた後段で説明することとする

② 検証の方法

a. 授業研究

本年度は総合的な学習の時間を取り上げ、1単元を焦点化していく。本年度立てられた「個別の指導計画」の中の短期目標と、総合的な学習の時間の単元の目標、授業研究を行う時間の個々の目標行動を並べて表示した表を作成していく。その中で以下のような形において検証を行う。

- 本授業では個々の目標行動を達成しうる支援がなされていたか。
- 目標行動が達成されていたとして、その目標行動はその単元の個々の課題を達成しうるものになっていたか。
- 単元の目標は短期目標を達成しうるものになっていたか。

b. 保護者へのアカウンタビリティ

保護者には、この「個別の指導計画」を作成、実施するにあたって多くの話し合いの機会をとっていただいている。保護者にとっても「個別の指導計画」が我が子にとって有機的に機能しているかということは大きな関心事であると同時に、私たちが保護者の意見を聞きそれが実際に児童の教育に生かされているということを説明し理解を得る必要がある。前年度はアンケートを実施して保護者の意見を伺ったが、今年度は個別の指導計画の短期目標の部分に保護者に提示する「未来へのあゆみ」の「学習内容」「ねらい」の部分とリンクし、短期目標の評価がわかりやすく行えるようにした上で、保護者からの聞き取りを実施していく。

c. 中心課題（長期目標）と短期目標との関連

本年度、中心課題を5領域に設定したが、その領域と各教科・領域、特別活動、総合的な学習の時間等の

関連については明らかになっていない。そこでその関連について年度の終了後に研修会を設け、その中で関連性や領域の妥当性についての協議を行い、来年度に生かしていく。

3. 「総合的な学習」の実践事例

(1) 総合的な学習の時間の実践内容

① 単元「なにをして、あそぶ？」について

児童が日常の学習の中で、課題を見つけ、それを解決していく過程で、これまで経験してきた既習の事柄や自分の考えを駆使することは必要なことであり望ましい姿でもある。

知的にハンディキャップをもつ児童にとって将来的に自分たちの生活をつくることのできるようになるためには、学童期から「本人参加」の考えを学校生活や授業の中で取り入れていくことが不可欠であると考え。経験したことを日常の生活で一般化することが難しかったり、大きな集団の中では受け身になったりする可能性をもつ児童にとって、自分の好みの活動を、将来の自主的な活動である余暇活動につなげていくという取り組みは学童期から必要であると考え。

本学級の児童は個々に自分たちの好きな遊びをもっている。それぞれの遊びは子どもの生活の中で必要なものであり、それは将来的に固有の「余暇活動」へと発展していくと考える。児童が自分たちで考えた遊びをグループ分けし、その中で互いにかかわり合いながら活動していくことは、余暇活動へスムーズに移行していくための一つのステップであると考え本単元を設定した。

実践にあたっては、まず児童が日常行っている遊びに注目し、その遊びを選択肢の中に入れて興味・関心を引くようにしたい。さらに、同じような遊びが好きな児童をグループ分けし、その中で児童が人やものとかかわり合いながら活動していくことを意図的に設定する。加えて、自分たちが企画し、計画をし、実行することで見通しや達成感、自己有用感を味わうようにしたい。

単元構成は以下の通りである。

- 第一次…楽しく遊ぼう～ぼくの、私のあそび～（2時間）
- 第二次…みんなと遊ぼう～友だちと一緒に～（4時間）
- 第三次…遊びの広場をつくろう（4時間）

児童個々の目標行動（第二次第3時）と単元の個別の目標、短期目標との関連表は以下の通りである。

資料 児童の短期目標と本単元における課題および本時の目標行動

児童	短期目標	本単元における課題	本時の目標行動
①	○周りの様子やいろいろな支援を手がかりに好きな活動を選んだり、友だちとともにその活動を楽しむことができる。 ○校外での学習や宿泊活動に興味を待ちながら事前学習を行ったり、当日触れるものや人に興味関心を抱いたりすることができる。 ○話の粗筋をつかみ、役になりきって自分なりの表現をしながら活動することができる。	写真カードや親しい友だちの選択を見ながら、自分で一つのものを選ぶことができるようになる。	自分のやりたいお店を、友だちの行動を模倣するなどして選び、写真カードをはることで自分の気持ちを表現することができる。
②	○周りの様子やいろいろな支援を手がかりに好きな活動を選んだり、友だちとともにその活動を行うことができる。 ○校外での学習や宿泊活動に興味を待ちながら事前学習を行ったり、当日触れるものや人に興味関心を抱いたりすることができる。 ○周りの友だちの様子や教師の働きかけを手がかりにしながらいっしょに活動しようとする。	カードの中から、興味をもったものを選んで指し示すことができるようになる。	2〜3枚の写真カードの中から自分のやりたいお店を選び、指さし等で指し示すことができる。
③	○周りの様子やいろいろな支援を手がかりに好きな活動を選んだり、友だちとともにその活動を行うことができる。 ○事前学習を行うことで校外での学習や宿泊活動に興味をもったり、大まかな見通しをもって当日の活動を行うことができる。 ○話の粗筋をつかみ、周りの様子や教師の働きかけを手がかりにしながらいっしょに活動しようとする。	カードの中から、興味をもったものを選んで指し示すことができるようになる。	2〜3枚の写真カードの中から自分のやりたいお店を選び、指さし等で指し示すことができる。
④	○今までの体験や経験を思い出しながらか好きな活動を選んだり、友だちとともに楽しみなが活動することができる。 ○事前学習により活動のイメージをもって校外での学習や宿泊活動を楽しみにしたり、見通しをもって当日の活動を行うことができる。 ○簡単なお話の内容を理解し、役になりきって他の役の人とかかわりなが活動することを楽しむことができる。	写真カードを見て活動をイメージしながら、好きな活動を選ぶことができるようになる。	写真カードを手がかりとして活動の手順を理解した上で、自分のやりたいお店をカードをはることで表現することができる。
⑤	○今までの体験や経験を思い出しながらか好きな活動を選んだり、友だちとともに楽しみなが活動することができる。 ○事前学習により活動のイメージをもって校外での学習や宿泊活動を楽しみにしたり、見通しをもって当日の活動を行うことができる。 ○お話の内容を理解し、役になることを楽しんだり、他の役の人とかかわりなが活動することを楽しむことができる。	写真カードを見て活動をイメージしながら、好きな活動を選ぶことができるようになる。	写真カードを手がかりとして活動の手順や内容を理解した上で自分のやりたいお店を言葉で表現することができる。
⑥	○自分の思いを、カードや言葉でストレートに表現して、相手に伝えようとする。また、多くの友だちや保護者とうまくかかわりながら、自分の役割をやりきろうとする。	自分の好きな活動の幅を広げ、友だちとのやりとりの方法を、知って、かかわりを楽しむことができるようになる。	写真カードやノートを手がかりとして、自分のやりたいお店を選び、言葉やカードを貼ることで表現することができる。
⑦	○自分の思いを、カードなどを用いて正確に表現しようとしたり、相手に伝わるような声の大ききで表現したりすることができる。 ○自分の役割に見通しをもつて、一定の時間自発的に役割を果たそうとする。	自分の好きな活動を選び、役割の見通しをもって仕事をやりこなすことができるようになる。	写真カードやノートを手がかりとして、自分のやりたいお店を選び、カードを貼ることで表現することができる。
⑧	○自分の思いを、文の形で正確に伝えようとする。また、自分の思いをある程度譲らず主張しようとする。また、友だちの動きを見ながら自分からかかわりをもつて活動しようとする。	自分の好きな活動の幅を広げ、活動の工夫をしながら、多くの人とのかかわりを積極的に楽しむことができるようになる。	既習の事柄を想起しながら、ノートを手がかりとして自分のやりたいお店を言葉で表現することができる。
⑨	○自分の思いを、伝え方を工夫して表現したり、友だちの意見にも気持ちに向けて思いを見直したりすることができる。 ○年下の友だちへのかかわり方を考えて活動することができる。	自分の好きな活動の幅を広げ、活動の見通しをもつて柔軟に役割を果たすことができる。また、年下の友だちに優しくかかわることができるようになる。	写真カードやノートを手がかりとして自分のやりたいお店を言葉で表現することができる。
⑩	○自分の思いを、カードや言葉を用いて積極的に伝えていこうとすることができる。 ○友だちと一緒にの場所で、かかわりをもちながら遊んだり仕事をしたりすることができる。	自分の好きな活動の幅を広げ、役割の見通しをもつて役割を果たしたり、お客さんとのやりとりをしたりすることができる。	多くの選択肢の中から自分のやりたいお店を選び、そのことを言葉やカードを貼ることで表現することができる。
⑪	○自分の思いを主張するだけでなく、相手の気持ちになって譲歩しようとする。また、友だちの様子や気持ちを考えながら、その場の状況に応じた適切な言動をとろうとする。	全体の様子を見て自分の所属や仕事を考えながら、お客さんとのやりとりを楽しむことができるようになる。	既習の事柄を想起しながら、ノートを手がかりとして自分のやりたいお店を言葉で表現することができる。
⑫	○全体のことを考えながら自分のやりたいことを決めることができる。 ○自分の役割をはたそうとすることができる。 ○自分のことだけでなく友だちのことも意識して一緒に活動することができる。	友だちや下学年の児童を意識してお店を決めることができる。また、その中で役割に気づくことができるようになる。	自分のやりたいお店を既習の事柄やノートを手がかりにして選び、言葉で表現することができる。
⑬	○自分のやりたいことを全体をみながら決めることができる。 ○友だちの様子ややっていることを参考に自分の活動にとりいれることができる。 ○みんなの前で大きな声で表現することができる。 ○自分の意志をまわりに表現することができる。 ○友だちを意識しながら楽しんで活動することができる。 ○劇など音楽や友だちの動きに合わせて表現することができる。	自分のやりたいお店を選ぶとともに、他の児童と協力して活動できるようになる。	自分のやりたいお店を写真カードやノートを手がかりにして選び、言葉で表現することができる。
⑭	○自分の意志をまわりに表現することができる。 ○友だちを意識しながら楽しんで活動することができる。 ○劇など音楽や友だちの動きに合わせて表現することができる。	自分のやりたいお店を選ぶことも他の児童と楽しんで活動することができるようになる。	写真カードを手がかりにして、その中から自分のやりたいお店を選び、写真カードを貼ることで表現することができる。
⑮	○まわりの様子を見ながら自分のやりたいことを決め、その役割をはたそうとすることができる。 ○他の友だちにアドバイスしたり誘ったりすることができる。 ○表現のしかたを工夫しながら活動することができる。	友だちや下学年の児童を意識してお店を決めたり、その中で役割を果たすことができるようになる。	全体の場で、下学年の児童の選ぶ様子を見ながら、そのことを考えつつ自分のやりたいお店と全体の調整を図ることができる。

4. 考察

(1) 本実践では個々の目標行動を達成しうる支援がなされていたか

本実践は自分たちが日常行っているあそびを選択肢として、総合的な学習の時間の中で自分たちであそびを選んで行っていくというものである。前ページの表にもあるように、本時の目標行動はどの児童についても「あそびを決める」ことがあげられている。本授業では具体物や絵カードを使用して、児童があそびのイメージを持つことができやすいような支援を行っていたため、ほぼどの児童もあそびを決めるために自分たちなりの表現を行うことは達成されたようである。

しかしながら、もう一つの単元の設定理由には、友達とかかわりながらあそびを構成していくというものがあつた。この目標に関しては、授業の展開の中にかかわりを意図的に設定する支援が少なかったため、支援を必要としないでもかかわれる児童しかかかわりをもつことはできなかった。このことは以下の点に原因があると思われる。

- ・単元構成の中で「自分で決める」ねらいと「かかわる」ねらいを設定する場面を同じ時間にもつたため、児童にとってねらいが明確にならなかった。
- ・本来自分で決めることは個人内の考えにおいて決定されることで、かかわりは自分の意思を調整しながら行うことであるから、それぞれ相反した性格もっている。その内容を同時に持つてくることに無理があつたのではないか。

(2) 目標行動は本単元の個々の課題を達成するものになっていたか

授業研究を行った時限だけでは全てにおいて達成されたとは言いがたいが、本単元を全体的に行っていく中で達成されたと考えている。しかし以下のような課題も浮き彫りになった。

- ・児童の個々の課題を単元の中で設定したにもかかわらず、個々の課題に迫る単元構成が思い切つてできなかった。従来の全体の「本時の目標」があり、それにとらわれていたと考えられる。今後はより個に迫る単元構成や授業の展開を考えていく必要がある。

(3) 単元の目標は短期目標を達成するものになっていたか

本単元では、短期目標の中の個々の達成課題を網羅していたと考えられる。ただ、短期目標は1単元だけで達成されるべきものではないので本単元だけで判断を下すことは早急であると考えられる。本研究では1単元だけの抽出なので、半期分の単元を抽出して判断

することが必要であろう。ただ本単元を見る限りにおいてはおおよそ妥当性があつたと考えることができる。

Ⅲ 中学校養護学級の個別の指導計画

1. はじめに

障害児教育において中学校は、障害児教育諸学校の中学部とその役割を分かち、小学校と養護学校高等部との間の時代を担当する。かつては中学校卒業後就職して社会に出る生徒のための教育が重点的に行われた時代もあつたが、現在では、養護学校高等部を主に進学が一般化してきた観がある。そのような状況で、中学校時代にどのような力を身につけさせればよいかという命題も抱えながら、我々のなすべきことは、一人ひとりの生徒の実態を見極め、課題を見だし、将来あるべき姿ゆくべき方向をいづらかでも明らかにしていくことが求められているのではないかと考える。

東雲中学校障害児学級(3組)は1学年8名、3学年で24名の生徒が在籍しており、「生徒の発達課題に応じ、社会的自立をめざした基礎的な知識・技術及び態度を身につけさせ、より豊かでたくましい生活力を育成する」という目標を掲げ、生徒相互の関わりを重視し、集団の中で自主的態度や社会的態度を身につけていく指導を展開してきた。

近年、本学級の生徒の障害の様子に変化が見られ、また、社会の変化から進路状況も変化してきた。これらに加え、障害児教育に特別支援の考え方が導入され、障害児教育自体にも変化が訪れた。すなわち個別の課題を明確化し、それに基づく個別の指導計画を元にして個に応じた内容・方法による教育がより強く求められることになった。

そこで本学級では、これらの状況をふまえ、この数年間で、生徒の実態を考慮に入れ、どの生徒も生き生きと、またのびのびと学習し、一人ひとりに必要な力を身につけることができるよう、カリキュラムの見直しや、新たな指導内容の創造、指導形態の改善などを行ってきた。

本年度はさらに全教科(等)についてチーム・ティーチング(T.T)を導入して、より細かな指導を可能にする体制を整え、さらにその考え方を具現化するため、個別の指導計画の様式を作成し、指導に生かすことを試みた。

2. 個別の指導計画と個に視点をあてた取り組み

個々の生徒への支援をより適切に、より確実なものとするためには、①個別の指導計画の作成、②カリキュラムの見直し、③授業形態の検討が必要であると考

え、取り組みを行っている。

①個別の指導計画の作成

個別の指導計画の様式として、以下にあげる3つのものを作成した。様式1(表1)は、担任が保護者との連携のもとに立てた指導計画案であり、長期目標としては、卒業時につけておいてほしい力をあげ、短期目標としては、長期目標達成に向け学年終了時につけておいてほしい力をあげている。また、保護者からの要望の欄は、懇談等で保護者の願いをききとり、記入している。目標達成に向けての各教科・領域における目標・内容・方法の欄には、短期目標を達成するために、各教科でどのような力をつけていけばよいのか、どのような内容でつけていけばよいのか、また、どのような方法でつけることができるのかを記入するようにしている。合わせて学校での生活をトータルで考えるために、休憩時間や部活動の時間における支援についても盛り込むように考えている。

表1 個別の指導計画 様式1

生徒名	年 級	年 級	3年 級	作成者
長期目標(卒業後を見据えて)				
<ul style="list-style-type: none"> ■にぶつかったときに、立ち向かっていく強さをつける。 ■に則しても、同じように楽しくコミュニケーションがとれるようにする。 ■高校生活の中で自ら関わりをもつようにする。 				
短期目標(学年終了時を見据えて)				
<ul style="list-style-type: none"> ☆受け書きす。課題に向かっていくようにする。(プリント学習での読書指導等。) ●周囲の友だちの気持ちを考えた行動をとることができる。 				
保護者からの要望				
<ul style="list-style-type: none"> ■社会性を身につけてほしい ●社会的な自立に向けて、いろいろなことにチャレンジしてほしい。 				
目標達成に向けての各教科・領域等における目標・内容・方法				
教科・領域等	目標	内容	方法	
日常生活の指導	友だちをきかせる気持ちをもちたい。	朝の会・朝の会	友だちの意見をしっかりと聞くようにさせる。質問できることは、応援・協力させる。	
生涯学習	考えられた役割に責任をもつ。	文化祭・運動会・レジャー・思い出作り	多くの役割を分担させ、係一つひとつの仕事が大切であることをわからせる。	
作業学習	作業に対する責任をもたせる。	夏祭りづくり・ぬづくり・まつり	作業を完成させるために必要な道具を揃え、手順を説明する必要があることを理解させる。	
国語	読書・コミュニケーション力をつける。	漢字・図明文・作文	マニキュア前に対応できるものもあり、文庫から読書をも勧めたい。自分の思いを文にすることを多く取り入れる。	
数学	最後までやり抜く気持ちをもたせたい。	四則演算・長さ・面積	解法を復習をしっかりと確認させ、一つひとつ丁寧にやる。	
生活	社会性を養う。	地図・生き物	生徒に役立つのある物を取り上げ、人が生活するために何が重要かを考えさせる。	
コミュニケーション・異年齢者との関わり	異年齢者との関わりを深める。	英語を使った表現・コミュニケーション	一つひとつの表現を覚えていることで、自信をもたせるようにする。	
芸術(音楽)	楽器の友だちと合わせたい。	合唱・楽器演奏	合奏・合奏を多く取り入れ関わりを深めたい。自分たちで演奏できるようにさせる。	
芸術(美術)	自由な表現	貼り紙・水画	数回しかいた紙もよりよいものが出来たら、形にこだわらない自由な表現での作品作りをできるようにする。	
体育	運動の楽しさや健康を大切にする。	ソフトバレー	簡単な運動であるので、チームの総力でチームワークの練習にも取り組ませようとする。	
選別学習	友達と協力して作品を作る	社会	一つの作品をみんなで作ることで、協力することの楽しさを伝える。	
休憩時間その他	円滑なコミュニケーションをとる	昼食時間、休憩時間他	友達とお話しする機会を大切にさせ、楽しく過ごすようにしてほしいのかをかんがえさせる。	

様式2(表2)は、各教科・領域の担当が作成するものであり、様式1をもとに、それぞれの生徒の長期目標、短期目標の達成に向け各教科でより細かな支援を行っていくために活用するものとしている。

また、様式3は、各教科・領域における年間計画であり、中間評価(前期総合)、総合評価(年間総合)の二つの欄を設け、各時期における生徒の到達度及び

意欲・態度の評価を行うように考えている。合わせて中間評価を行った後の後期の目標・内容・方法の再検討・修正、総合評価を行った後の次年度の指導計画を立てるための指導者側の評価も含めて行っていくことで、この個別の指導計画がより有意義なものとなると考え、作成するものとした。

表2 個別の指導計画 様式2

教科(音楽)
一つひとつの言葉を大切に、より確かな歌詞で歌うことができる。
一つひとつの言葉を大切に、より確かな発音で歌うことができる。
歌詞の意味に関心もち、歌うことを楽しむことができる。
歌の雰囲気を感じとり、表情や身体の動きも合わせて表現することができる。
耳と目からより確かに歌詞を覚え、正しい発音で歌うことができる。
歌詞の意味に関心もち、一つひとつの言葉を大切に歌うことができる。
一つひとつの言葉を大切に、大きな声で一輪に歌を奏しむことができる。
歌詞の意味に関心もち、表情や身体の動きも合わせて表現できる。
歌詞の意味に関心もち、表情や身体の動きも工夫して表現することができる。
歌詞の意味に関心もち、より確かなことばで歌うことができる。
一つひとつの言葉に関心もち、歌の内容を言葉しながら歌うことができる。
歌の内容に即した声の出し方を工夫して歌うことができる。
ひとつひとつの言葉の意味を考えながら、それに即して歌うことができる。
歌の雰囲気を感じとり、それに合わせた表情や身体の動きで表現することができる。
歌詞の意味に関心もち、一つひとつの言葉を丁寧に歌うことができる。
歌詞の意味を理解し、一つひとつの言葉を丁寧に歌うことができる。
歌詞の意味に関心もち、一つひとつの言葉をはっきりと歌うことができる。
歌詞の意味に関心もち、表情や身体の動きも合わせて豊かに表現することができる。
一つひとつの言葉に注意を向け、正しく発音して歌うことができる。
歌詞の意味に関心もち、一つひとつの言葉を丁寧に歌うことができる。
歌の雰囲気を感じとり、それに合わせた表情や身体の動きで表現することができる。
歌詞の意味に関心もち、それに合わせた表現を工夫して歌うことができる。
歌詞の意味を理解し、それに合わせた表現を工夫して歌うことができる。
歌の雰囲気を感じとり、それに合わせた表情や身体の動きで表現することができる。

表3 個別の指導計画 様式3

生徒名	年 級	年 級	3年 級	作成者
目標達成に向けての各教科・領域等における目標・内容・方法				
日常生活の指導	目標			
	内容			
生涯学習	目標			
	内容			
作業学習	目標			
	内容			
国語	目標			
	内容			
数学	目標			
	内容			
生活	目標			
	内容			
コミュニケーション・異年齢者との関わり	目標			
	内容			

この計画案を障害児教育に関わる担任・副担任が一堂に会し検討を行い、修正を加えていくことで学校としての最終的な個別の指導計画案となる。その後、保護者に学校側の考え方を提示、説明し、合意を得ることで個別の指導計画として完成となる。この個別指導計画を基に、学校・家庭が連携していくことで、個々の生徒により有効な支援を行うことができると考える。

②カリキュラムの検討

一昨年度より、24名それぞれにとって有意義な授業を考えていくために、カリキュラムの検討を進めてきている。個々の生徒に適切な支援を行うためにどのようなカリキュラムが求められるのかを考えていくことで、一昨年度より「体力・リテラシー」の時間を作り、昨年度は、表現・コミュニケーション力の育成に重点をおいた「コミュニケーション・英語」、より少人数で個々の課題に応じた内容を自ら選ぶことができる「選択教科」の二つを設定した。

表4 週あたりの授業時数

教科・領域	生活単元	作業	国語	数学	体力	生活	芸術	体育	コ・英	三組活動	学級活動	総合	選択教科	計
	前2後4	2	前3後2	前3後2	4	1	3	2	1	1	2	2	2	28

* 総合：総合的な学習の時間 コ・英：コミュニケーション・英語
体・リ：体力・リテラシー

「体力・リテラシー」の時間とは、生活の基盤となる体力作りと言語・数量の基礎・基本を個別の課題に応じたプリント学習で行う時間であり、月曜日を除く4日間の1時間目に設定し、継続して行うことで力をつけていけるものと考えた。

「コミュニケーション・英語」の時間とは、現在、卒業後に必要とされるコミュニケーション力の育成に重点をおき、英語を使ったコミュニケーションや身体表現などの言語以外での表現を身につけることを目的とした時間であり、コミュニケーション力という観点から二つの課題別グループを作り、授業を行っている。

「選択教科」の時間とは、個々の生徒の課題を考え設定した選択肢（20程度）を生徒に提示し、それぞれの生徒が自分の好きなこと、自分が苦手な克服したいこと、得意分野にさらに磨きをかけたいことの観点から自ら選び参加していく授業である。この授業は、生徒自らが活動内容を選択し、主体的に参加していける

授業であるとともに、1グループ2～3名という小グループでの学習であるため、個々の実態に合わせた適切な支援が行いやすい授業でもある。合わせて、個別の指導計画に盛り込まれた個々の課題にあわせた具体的な活動を行いやすく、他の教科・領域では扱いにくい内容についても積極的に取り入れて行うことができる。基本的には、半期ごとに履修内容は変更させるが、生徒の希望、前期末における評価によっては、同一のものを選択させ引き続き履修させる場合もある。

表5 選択教科一覧

前期開設授業	後期開設授業
選択社会	選択体育
選択音楽	選択音楽
選択美術	選択家庭
お話・演劇	お話・演劇
料理	料理
茶道	茶道
生き物	自転車
アウトドア・洗車	工作

③授業形態の検討

本学級では実際の指導にあたっては、教科等の目標に対して最も適切な規模になるよう、大小様々な学習グループを設定している。こうすることによって少人数グループにおいても24名の生徒たちが、より多くの仲間たちと共に学ぶ機会をもつことができる。

表6 本学級の学習グループ

教科等	グループ数	1グループの人数	種別
国語 数学	3	8	課題別(1)
生活	2	16, 8	任意・希望
作業	3	7, 8, 9	
コ英	2	11, 13	課題別(2)
選択	8	2～4	希望
学活	3	8	学年

※これ以外の教科等は原則一斉指導

昨年度まで国語・数学はそれぞれ4名の教師による4グループを編成して指導したが、本年度はこれを6名の教師による3グループ編成に改め、その他の授業もすべてT、Tで行うこととした。これにより、国語・数学については基本的には3グループであるが、6名の教師による6グループによる学習も可能である。この小グループ化を利用した指導については、以下に詳しく述べる。

3. T. Tの2つの形態～Bグループでの比較検討

(1)数学Bグループ

①生徒の実態と指導体制

本グループは8名の生徒を2名の教師で指導している。生徒の実態としては、2桁の数まで扱うことができ、具体物または半具体物を操作することで計算ができる生徒が4名と数の位取りを理解し5桁を超える数にも対応でき、繰り上がり繰り下がりのある計算も数式のみで行うことができる生徒が4名と大きく二つのグループに分けることができる。

指導体制としては集団を生かした取り組みを原則とし、8名の生徒を分けることなく2名の教師で指導を行い、必要に応じて個別的な指導を行ったり、グループに分かれ指導するなど柔軟な対応を行っていくこととした。

②個別の課題と集団指導

本グループでは、個別の課題を集団指導の形にまどめていくための手だての一つとして、体を使ったサインを授業に取り入れた。生徒は答えを導き出すまでの過程や考え方を他の生徒に発表し、聞く側の生徒も発表された内容がどうであったか、体を使ったサイン(「あっているよ」「もう一回やったほうがいいよ」「もっと違うやり方があるよ」のサイン)で表し、それをきっかけとして、互いに励まし合い、教え合い、学び合いながら学習を進めていった。そのような様々な関わり合いにより、個々の課題にそれぞれが取り組む学習や「生徒と教師」という関係のみの指導では、得られない学習の広がりをもたせることができたのではないと思われる。

生徒Aは、学習のペースが他の生徒より遅いが、友だちのやり方を見本としたり、生徒同士や教師とのやりとりや励ましを通して、自分の考えを組み立てていくことができた。生徒Dは、やる気はあるが集中力に欠ける面がみられたが、サインをすることによって他の生徒の発表にも注目でき、競争心も高まって意欲的に意見を出した。生徒Fは、考え方や計算も他の生徒よりも確実に行えるが、みんなの前で発表したり、意見を述べるのは苦手である。しかし、体を使ったサインなら受け入れやすく、発表するというより他の生徒に教えるというアプローチであれば、自分の考えを整理しながら自信をもって伝えることができた。

③T. Tによる指導

生徒8名を教師2名で指導するにあたり、一人は前で全体の状態を把握しながら授業の流れを作り、もう一人はそれをフォローしながら個々の生徒の細かい援助を行っていくという役割分担をして指導を進めた。指導内容によっては、その役割が入れ替わったり、グ

ループに分かれてそれぞれが指導を行ったり、一人が生徒のモデルとなって問題を解いたりするなど、教師間で連携しながら、状況によって臨機応変に対応していくよう努めた。

また、一人より二人の目で生徒を見ることにより、それぞれの気付きや考え方を学び合うことができ、より客観的な評価と細かい指導が行えたのではないかと思われる。

④今後の課題

集団指導をより効果的に行うためには、個々の実態把握や適切な課題の設定が重要となってくる。しかし、そのために必要な教師間での日々の授業の反省や情報交換をしっかりと行っていたかは課題が残る。

また、集団指導を行う一方で、個々の課題に対応した教材・教具の工夫や開発についてもさらに検討していかなければならない。

このような取り組みを行うことにより、集団で培われた個々の力を、個別の課題と照らし合わせながら分析し、個別の指導計画や今後の授業づくりに生かしていかなければならない。

(2)国語Bグループ

①生徒の実態と指導体制

国語では生徒の実態をふまえ、8名をさらに二つの小グループに分けてそれぞれ1名の教師が指導している。生徒の実態は、学習内容を理解して主体的に学習に取り組むことができる生徒が4名、理解するのに時間がかかり、ゆっくりしたペースで学習を進めていく方がよい生徒が4名であるので、二つのグループに分けることを考えた。しかし、このまま4名ずつにわけると一方のグループはひとつの学年のみの構成になってしまうので、学年の人数バランスも考慮に入れて小グループを編成した。指導体制としては、個を生かした取り組みを原則とし、必要に応じて8名の生徒を2名の教師で指導するという形で進めていくこととした。

②授業での生徒の様子

小グループにおける指導では、教師1名に対して生徒4名ということで一人ひとりの実態がつかみやすいというよさがある。それを学習の進め方や生徒への対応の仕方に生かして、生徒のペースにそった授業内容を組むことができた。

生徒Dは国語への関心が高く、発表意欲もあるが、正確さや集中力に欠ける面が見られたので、細かいところに目を向けて取り組むよう常に声をかけた。また他の生徒の見本となるような発表をする場を設けるなどして、周りを意識させながら学習を進めることで、楽しく参加することができた。

学習のペースがゆっくりしている生徒Aは、他の生徒より作業に時間がかかり、発表も少ないが、教師が授業内容を絞って書く量を少なくすることで、時間内にやり遂げることができた。また、グループの他の3人がするのを見て手本にしたり、友達の励ましを受けながら自分の思いを発表しようとする場面も見られる。

もう一つのグループでは、国語の学習で何がやりたいかをはっきり言える生徒が多く、それらを実現してやることによって、意欲が増大し、より主体的積極的に取り組むことができる。例えば、説明文の学習では、4人が主体的に文を書き進めたり、発表する内容を決定したりすることができた。

③今後の課題

少人数によるグループでは、単発的な発言に終始したり、話題が広がらなかったりすることも少なくない。さらに、お互いを高め合うような刺激が少なく、多様な意見や感じ方を知る機会も限られてしまう。そこで、必要に応じて集団を生かした学習や取り組みをしていくことで、生徒が互いに刺激を受け、それが個の課題解決に有効に働いたり、意欲を高める手段になったりすると考える。

以上のことから、少人数指導を行うにしても集団指導を行うにしても、どちらも教師間の連携や情報交換が必要であることがわかった。各グループの学習内容や指導方法、生徒の様子などについて授業の反省も含めながら、教師同士が話をすることで、次の授業で個をどう生かしていくのか探っていくことも大切である。しかし、現状では、十分な話し合いができていないことが課題である。

今後は、それぞれの指導体制で培われた個々の力を生かせるよう、教師集団が連携を取り合って、指導計画や指導方法の改善を模索していかなければならない。

4. 成果と課題

(1)個別の指導計画

様式1については、当初授業についてのみ記載することとしていたが、障害をもった生徒の指導という観点からは、一日のあらゆる時間において指導が継続されるべきであり、事実改善すべき行動は授業時間以外に現れがちである。そこで、「休憩時間その他」の欄をもうけ、一括ではあるが、授業時間以外の時間の目標等についても記述できるようにした。これによって本指導計画は生徒の学校生活一般に関するものとして活用できるものとなり、生徒個々の生活指導において担任間の方針の統一とその後の検討に寄与している。

様式2については、非常に簡単な様式であり、これまでも各教科(等)担当において作成されてきたものであるが、改めて様式として定めたことで、比較や検討が容易になった。

様式3については、これまで作成されていた各教科(等)の年間指導計画を個別化したものである。元になる年間計画に様式1と2に記述された生徒個々の目標等を取り入れ、最も具体的な指導計画となるものである。評価も同時に記載できるので、そのまま通知表にできる内容を含んでいる。しかし、現在の各教科(等)の年間計画の記述を使用し、さらに個別の目標等を反映させると、かなりの量になると予想されるので、様式3に含む内容と通知表に含む内容及びその様式は関連をもたせながら、さらに検討していく必要がある。

(2)カリキュラム

体力・リテラシーについては、1日の時間数をそれぞれ1/2時間とし、1校時目に配置している。3年目の今年卒業する3年生の生徒たちを見ると、体力の面で1年生の時のひ弱さが強く思い起こされる。持久走のタイムの比較では、変化よりも各回のゆらぎの方が強く、効果の判定はできなかったが、欠席の日数が目に見えて減少したり、週の終わり金曜日あたりの様子、あるいは一日の内でも終業に近づいた頃の様子を比較しても明らかに違いがある。成長期であり、身体がしっかりしてくる時期であるので、すべてこの体力づくりの成果ということではできないが、一定の効果が上がっているとらえている。

なお、本学級の生徒の中には、卒業後肥満の傾向を示すものが毎年1~数名ある。またより一般的な傾向では、学齢後の生活の中でそういった傾向を示すものが多い。多くは運動の不足である。学校で毎日運動する習慣を、家庭や、卒業後の生活の中心となる場で継続できない場合、肥満という結果となって現れる。本人の中に意識として習慣づけられていても、それを実行できる環境がもうけられるかどうかにかかっている。在学中は少なくとも意識の部分に習慣づけていきたいものである。

リテラシーの時間は短時間でも毎日の継続を時間的に保障するものとして実施したが、現実には日常の国語・数学の指導(教材研究・作成)にこの時間の課題作成が加わり、教材作成者と指導・監督者が異なることもあって、計画的・継続的な実施は円滑さを欠くことが多くなった。

反面、1校時目を学級(学年)担任の時間として固定したことで、学級活動はスムーズに進めることができた。特に毎朝行う朝の会の内容を充実し、丁寧に行

うことができ、その後の一日の学校生活全般において生徒の主体的な行動を呼び起こしたのではないかと考える。また、個別の指導という観点からも、家庭からの連絡ノートの内容をゆっくり確かめ、必要な指示・指導を行うことができた。

コミュニケーション・英語については、未だ試行錯誤的な面が多くあるが、引き続き指導の内容の精選を行い、3年を1サイクルとした指導要領の作成を視野に入れて実践を継続する必要がある。コミュニケーションという新たな指導内容に関わる部分と、英語という既存の教科を対象となる生徒に合わせて再構築するという部分が含まれる。今後はコミュニケーションの部分により力を注ぎ、個別の課題の解決に資することができるような指導内容を構築する。

選択教科については、指導の1形態として、また1教科として生徒にも教師にも定着した観がある。スタッフは今のところ3組の担当教官(常勤・非常勤含む)6名と教科の非常勤講師(15年度は2名)に限られるので、開設する教科にも自ずと限りがある。1教科の受講人数は8教科開設で3名(2名または4名の場合有り)となり、人数的には適切な規模と考えている。今後必要なことは、内容をより充実させることももちろんであるが、個別の指導計画に対応して生徒一人ひとりの課題の解決にあたるひとつの方法であるという観点から、きめ細かな指導計画の作成が必要である。

(3) T. Tについて

今回の比較検討においてはどちらかの方法が優れているという結果とはなっていない。また、教科の特性によるものと考えられる違いも明確にはなっていない。継続して検討する必要もあるが、いずれの方法にしても、それぞれの長所を組み合わせ、必要に応じ柔軟な形態をとることができる設定が必要であろう。また、二人の教師間の情報交換と、二人の異なる視点と専門(得意)分野を生かした指導方法や教材の開発を行うことが重要であるとの指摘がなされている。

我々が生徒の指導に当たって心がけている「個を大切に」するということはチームを組む教師間にもそのままあてはまるのであろう。

5. おわりに

我々は個別の指導計画の実行にむけて指導計画の策定のための様式作りにとどまらず、計画がスムーズに実行できるためのカリキュラムの整備や新たな指導内容の創造、指導形態の比較検討などの環境づくりを並行して行ってきた。本稿ではふれなかったが、保護者(家庭)や地域との連携も必要である。

これらが総合されて形としての個別の指導が可能になる。それにも増して、意識の中に個を尊重し、個を生かし、個を伸ばす信念が必要である。今後もこの信念を絶やさぬよう、実践を重ねていく所存である。

IV 結論

今年度は、昨年度のアンケート調査の結果から、保護者、小・中学校及び大学が実際に連携を深めていくための具体的な方途を探ると同時に、児童・生徒の実態把握や、それに基づいた指導計画の作成、教育実践などを事例的にを行い、個別の指導計画についての相互の共通理解を図っていくことを当初考えていた。しかしながら、これらは十分に達成されたとは言えない。まずは、心理検査の実施等を含む児童・生徒の詳細な実態把握を、小・中学校と大学が協力して今後行っていくことが必要であろう。

また、個別の指導計画に関しては、現在各地で様々な取り組みがなされているが、児童・生徒の現在及び将来の、家庭、地域、学校での生活をより充実したものにしていくために、本人や家族のニーズやライフスタイルを重視し、収集した情報に基づいて、明確な進捗評価が可能な長期・短期目標を立て、そこから必然的に生じる指導内容の個別化を図っていくことが、その基本的な理念ではないかと考えられる。児童・生徒の実態によっては、個別のスケジュールを組むことも必要になるかも知れない。これらの視点から小・中学校の個別の指導計画を見ると、今後さらに検討していくべき課題が残されているように思われる。

参考文献

- 石原和樹・西谷勝弘・玉木昌裕・藤原隆著「知的障害を伴う自閉症児への教育的対応に関する研究」 広島県立教育センター研究紀要第30号 2003
- 志賀利一著「発達障害児者の問題行動 その理解と対応マニュアル」 エンパワメント研究所 2000
- 清水貞夫監修・三浦光哉編・宮城教育大学ITP研究会著「新・個別の指導計画と個別アプローチプラン—日本型IEPの実現を目指して—」 学苑社 2000
- 東京IEP研究会編「個別教育・援助プラン」 財団法人 安田生命社会事業団 2000
- 安田生命社会事業団編「個別教育計画の理念と実践—IEP長期調査研究報告書—」 財団法人 安田生命社会事業団 1995